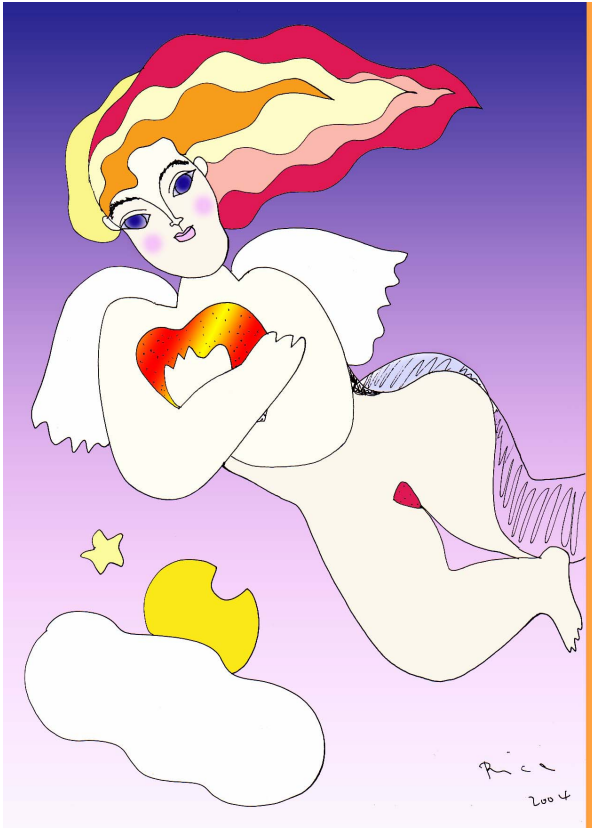


イカつはいく天国

えとはいく
おじゃらりが

まえがき

山頭火の俳句の書写というのをやっていると、いつものように、自分の俳句というのも浮かび上がってくる。

そうして、それを書き留めておいたのがたまってきたので、あまり増えすぎないうちに、句集にしておこうと思い立つ。

正確には、山頭火の七百枚もの俳句をホームページに加工するのが結構大変で、その合間の、息抜きに、自分の句集を作るという感じかもしれない。

たいしたことがない俳句が並んでいるというのは、相変わらずのことで仕方がない。

思い立ったら、電子本なので、表紙や挿絵をどうするのかとか、タイトルをどうするのかとかを考える。

手持ちのイラストのファイルの中から、使えそうな作品を数点選び、最終的に残ったのが、天使の絵だったので、タイトルは、『イカスはいく天国』でいっか。

みたいな、深く考えもせず、句集のタイトルは決まってしまう。

そうして、今まで作ってきた作品を、ワードに打ち込みながら、推敲してゆく。

句集というのは、短い文章なのにページ数を稼げるということもあり、毎度毎度、あっという間に出来上がってしまうので驚かされる。

『自分で作れると安くて助かるぜ。』

ま、そんな感じの句集ではありますが、お時間あったら、覗いてやってください。

二〇〇四年　春　　おじゃうりか

もくじ

まえがき
◆俳句の書写
◆ゲージツ活動@あとりえ
◆電車の中
◆出産見舞い
◆花
◆俳句モード
◆元気
◆猫
◆掲示板
◆連れ句
おわりに

◆俳句の書写

『種田山頭火』や『尾崎放哉』の俳句集を、インターネットで、無料でダウンロードできることを知り、自分なりに冊子に改定、習字のお手本にしています。

初回の書写では、俳画も入れていたのですが、現在は、書だけにしています。

優れた俳句というのには、句そのものに力があるので、文字を読むだけで、映像が湧き上がってくるものなのです。

もしくは、理解できない俳句があった場合、それがどんな意味なのかを考える。それが、俳句を読むということなのだということに気づいたからです。

俳画があるために、『文字から湧き上がってくる強い力』が別な方向に流れてしまうのは、私としても全く不本意で、楽しみが半減したキモチになります。

どちらにしても、『俳句の書写』というのは私の俳句を学ぶ場所であり、また、自分の俳句が沸きあがってくる貴重な時間でもあるのです。

相も変わらぬテキストで山頭火で

もうやめたらどうだと猫が笑ふ

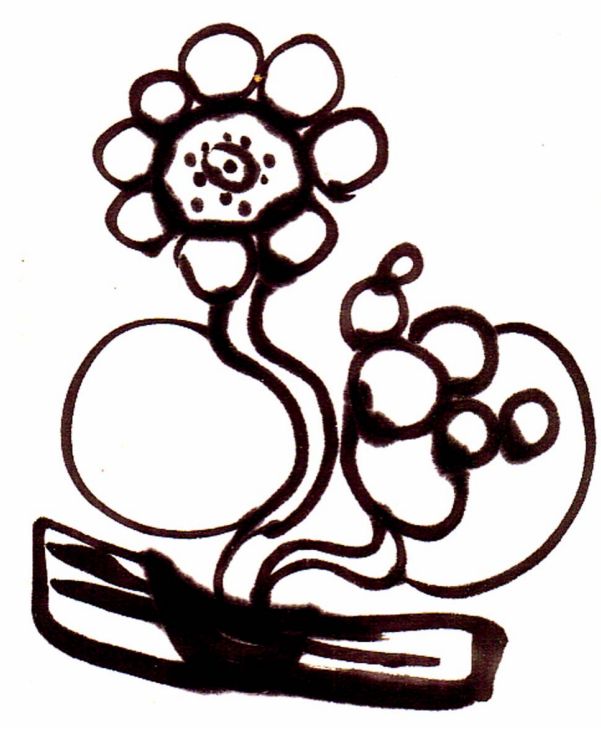
まだ乾かぬ書のうへ爪をとぐ

まだ読んだことのない俳句床に広がってゆく

乾くまでの間、花を切る

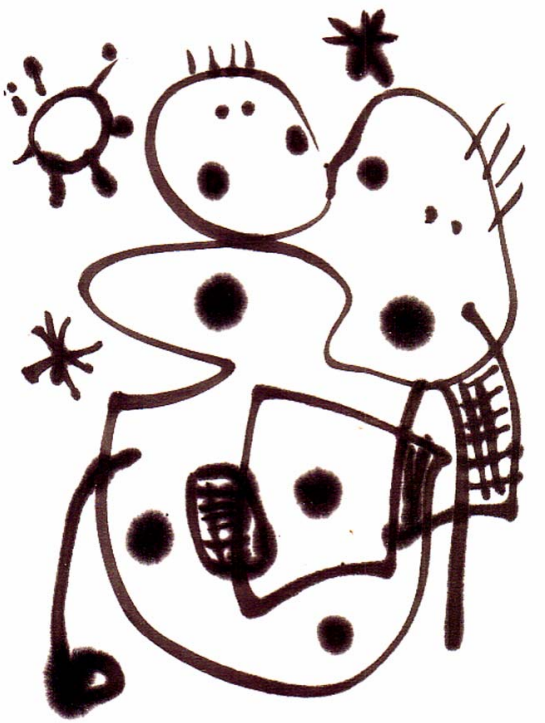
『秋風の石』の迷はまだ冬で

今年の夏は涼しくて助かるカチカチカチカチ



黒い墨液　滲むまま太陽花

書写にもらくがきにも春



にじみゆく薄墨の笑顔

やっと百枚となりゆがんだ文字である

紙も墨もたんとある、さあ

文字多キ俳句ノ　ビミョーバランス

半紙に埋もれては文字を眺めてみる

書き損じすら灰に戻れない東京

洗濯ばさみに連なれる半紙

滲んだままの「凪」一文字がお手本

『凪』の手本が壁にぽつり

この書は、「婦人画報」2000号特大記念の記事にあった、コシノヒロコセンセイの書を、お手本に、アタシが書き写した作品です。

『ゆふべもよろし』のもじへのへのもへじ

書に番号して並べてゐる

真っ直ぐに書いたつもり　曲がってゐる

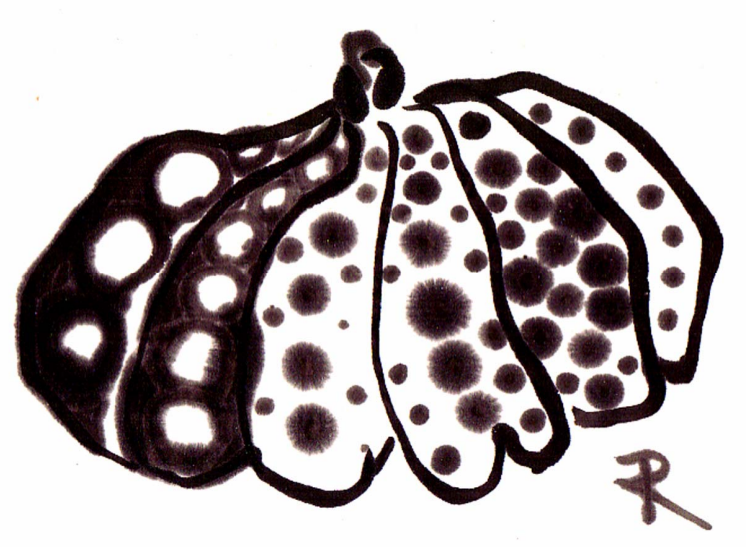
止まらずに書く

心の行き届かない筆である

ホームページになっては下手だと思う書ではある

もっとゆっくりと、もっと、そーっと

◆ゲージツ活動@あとりえ



この作品は、「草間彌生」センセイのカボチャの絵が、
高そうで買えないので、自分で描いた作品です。

少し欠けたハンコ、ぐるぐる削ってみる

印材が届いて、また二つ作ってみる

マニュアルは六冊、メールはまだ

外はうだっている、玄関は開けたまま

絵を見返す、記憶が引き戻される

探せば出てきもせず

不愉快な時間　固まってみる

来客用のカップ、来客用の珈琲豆

おちたばかりの珈琲の猫舌

エアコン兄ちゃんたちへ：
『ジグリとモカのブレンドでございます』

今日は人が来て少し絵を描いて

顔ばかり蚊に刺されている

何にでも使われるパレットは一つ

大切な写真を忘れていたよ

のりを混ぜすぎたね、猫の目が滲んでいる

ポストも雨漏り、手紙の文字も滲む

ぶるうのインクだよ、ぶらんすのにおい

指先が冷たくなる午後

珈琲カップで暖める指先

トイレの柱のふしの目ん玉に見られてゐる

同じ歌ばかりのラヂオの英語

聞き飽きた歌　何処かへと流れゆく

天気予報も英語で今日は百三円

新聞を拾っている話になる　くれるという

頂いた新聞広告が笑う、俳句募集

風のうなり電車の音にとけてく

宮本三郎の絵を見に

皇后様のお作のウナギのむらさき

スっと引っ張った線の潔さよ

はなの絵はきんいろにふんわりと咲く

「手本は大自然あるのみ」と青邨の手記

ホッチキス針が見つからずルノワルの画集赤く

下塗りしたカンバス　白を塗り重ねる

障間風のあとりえ　春一番

電車の音と春風がぶつかる

ひっきりなしに通る電車に揺らされてゐる

あとは自分で進むだけの道である

◆電車の中

ケータイを見つめる女ヤネクタイ

ビトン柄の女は並んで黒いシャツで爪

眠る姿までビトンバッグの二人

部活バッグにぶらさがるバッシュとぬいぐるみ

濃い化粧の制服のハイソックスが笑ふ

幾何学英語とパソコンゲームに挟まれてゐる座席

電線だらけの空が流れてゆく

ペンキ模様のシーンズはペンダント野郎

薄着の女たちがゆきすぎる夕暮まえ

『電話お切り下さい』のマーク
着信音が広がってゆく

制服スカートの足によきり

ずぶ濡れて、山頭火のキモチ

新しい帽子買えぬ春

◆出産祝い

ショッピングカートの中へ画帳とクレヨン

帽子とつながる襟の風の日

朝日バス　回数券をお取りください

ちっちゃな手が描パンチ

ホヤホヤに言い聞かせる　親の夢ばかり

◆
花

マーガレットとガーベラ。
　　咲いたままのショッピングカート

母の白いゼラニウム　ポッと立つ

旨風が行っちゃって、鉢が転がるばかりの朝

◆俳句モード

俳句を選んでみる、悩みぬく

箱の中、ゴミばかり出している

書き留めておく浮遊する俳句

パソコンノートなのに　俳句ばかり

冷夏は夏となり　汗を思い出す

青空が広がり　麦藁帽子で

みやびさんの俳句ダーキッシュピンク

◆元気

あたしは、画家を目指していて、日々絵を描いています。でもまあ、生計が立てられているというワケではないので、『売れない画家』ということになります。

売れない作品なりにもコンセプトがあり、『気軽に飾れて、見るたびに、元気がでたり、ホットできる作品を作るのが夢』です。

私は、そんな『元気が出る作品』のことを、『元気あーと』と呼んでいます。

そんな、自分のアートの中に、俳句を入れたい。

私の俳句は、実はそこからスタートしています。

『元気がでる俳句』

これが俳句なの？

そんなのもありますけど、ヨカッタら見てやってください。

ぐっとくるね、笑顔

アフロだね、自己主張だね

恋でも愛でもドンっと来い

グッドです、グッドモーニングです

疲れたと思ったら休んじゃえ

たまには怒ったほうがいいよ、自分にね

ずっと考えていた、見つかった

心はスタンバイ、あとはぶつかってみる

オレンジ色だね、キレイだね

夕日のキモチ、アタシのキモチ

少し思い出しては　空を見つめている

今、自分に出来ることからはじめやう

元気かい？元気です。

おんなじことくりかえす、少しおっけー

お日様とアタシ、今日も元気

元気満タン、はーと準備オッケーです

きっと叶ふ

きっと見つかる

きっといいことがある

昨日までの夢、新しい夢になる

こころをひらいて自分を見つめれば

迷わずに一歩

◆猫

猫は眠りにつきたそな　電車の音

背中を干している猫で黒ブチで

ブチよまたあした

見慣れぬ猫が、ひょっこり壁のうへ

猫がまた来た今度は覗き込む

猫は寝てしまう古タンスの中

猫のくしゃみ、電車の音（他に音はないあとりえ）

◆揭示板

ここには、私が、インターネット上の掲示板に書いた俳句を掲載しています。

掲示板に書き込まれた文のつながりから作られた俳句が多く、俳句としても、推敲が十分でなかったりもしますけど、私なりには、『ああ、この俳句、センセイの版画を買ったときだ。』とか、『●●さんが、ウチの掲示板に来てくれたときだ』なんていうふうに、当時の記憶が蘇ってきて、俳句にも、絵と同じようなカがあるものなのだと、驚かされます。

いくつも作っていて、あちらこちらにバラバラになり、ネットの中に埋もれたり、消えていったりしてしまうので、何かのタイミングでまとめておこうと考えて、今回、思い出深い作品を、句集の中に入れることにしました。

赤いエンボスに赤れ

俳句も版画も『は』で始まるあーと

花柄のハンコ　一つあってもいいわね

抽象画となった女はまだ語らず

霞を食べながら描く
　　薄のばしのカンバスの裏の絵である

綿菓子と思えば霞も悪くない　星空

冊子なぞが配られて年越しの蕎麦湯につかる

カンバスの女が煙草を吸うまで　あと少し

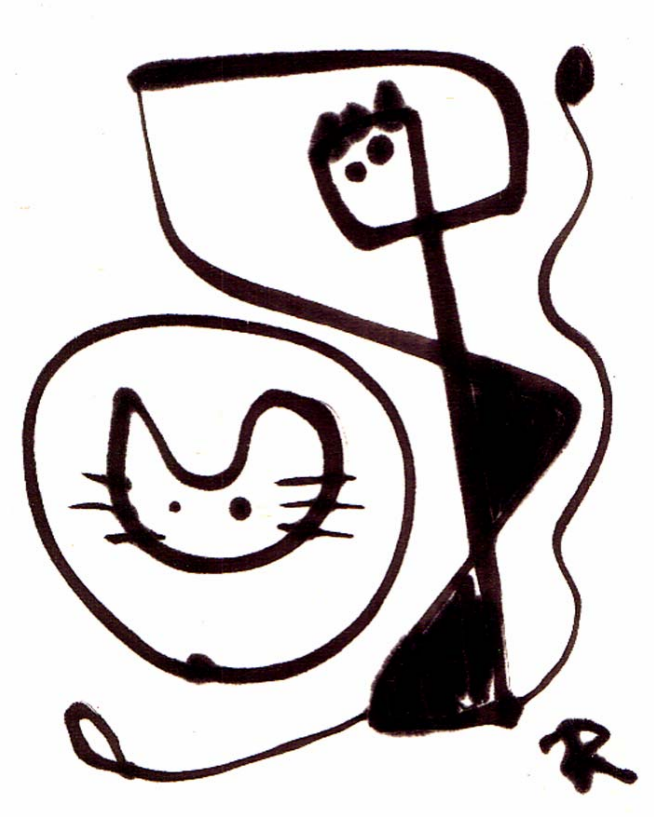
チーズフォンデュは　永久に未知の味

『0』と『1』の写真　パソコンで見る

東京はもう秋　赤い靴を買う

オールUの女　人生までも

小手先派も頭脳派も棚頼み



◆連れ句

『連れ句』というのは、前の方の句を見て、連れシヨン感覚で俳句を詠むことなのだそうです。

私のホームページには、『前の人が残した言葉から連想した言葉を書いてゆく掲示板』というのをアレンジして、『連れ句の掲示板』というのをつけています。

ここには、そこに寄せられた俳句から連想したアタシの俳句を掲載しています。

連れ句というのは、思いのほか沢山俳句が作れるんですねえ。（あきらかに前の方の句を直したとか、俳句ではないというのは除きました。）

フツーの恋の道ばかりでヨカッタのか悪かったのか

紳士も淑女もどうかお楽しみ下さい　春夜

春眠だ起きたくもない枕

自分の扉には自分なりの鍵

扉は誰も開けてはくれない
　　向こう側にしかないもの

フランスのプライベートスクールは黒い扉の向こう

月で餅をつきすぎて疲れたうさぎのぬる燗

猫の毛の筆で描く　線一本

音符が降ってきた夜空の君とニト

空がピカリとして　ポカポカになる

隠し切れない恋の　春模様

地球はれかぁ男と女

花を植える保りの人のパンヂー　そっと揺れる

熱いムードのベンチは目をそらして歩く

おむすびが落ちてゆく　おいかけて

黄な粉を降りかけた兎が海の上から逃げてくる

日曜日　カベルネワインの団欒

富士山の絵は白い雪をかぶったまま

予定から大幅短縮された完成品が今も

嘘ばかりつていてるおんなの　男運の悪さよ

とども渡りきり　新しい銀世界

今日の俳句運　『マンモスハッピーの渦』

枯れ切った土にシャワー　新しい芽になる

雨につつかれて芽吹きだす薄緑

日のあたる場所　ほほが緩む

四年も失業中の夫婦で求職中

烏森の旅館には美人のつつと

そこここに春があふれて　新橋

路地裏ガーデンにも春がそっと

雨水にドボンとした足も　春の匂い

すずめの足跡が頬の上にも　笑顔

ぬる燗でふけゆく再会

ポロリと落ちてきたハートのかけらがてのひらの上

風に飛ばされないかと心配になる植木鉢

少し泥が混じった雪のうさぎが小さくなる

なごり雪を聞いては　君のこと

高圧電線経由で届くチョコレートの写真
　　赤いリボン

白が赤が迷っている　ホーホケキョッ

とけゆく春にニポポの句

・・・・の後に続く兎の足跡

雲からもれてくる天使のはしご、雲まであと少し

春日に翼が解けてゆく　春が落ちてくる

年は隠せない　保水力

瓦が白く光って　ポタリと冷たい

硬派のポーズ　遠くから

霞を食べる天使　笑顔で栄養補給

お日様頼みの春　溶けた雪はまた来年

梅のつぼみがふくらんだ枝だ　ポカポカ

おみくじを梅の木に巻きつける日向

女将の愛想笑いでも　癒されるぬる燗

シュールな酒場なのか、場末なのか
『実験映像ワールド』

カラカラと音がする瓶の中で　覗いて見る

梅の香りはんなりと　祈願詣での男坂

うそつきな雪　君の手のひらに舞う

裸木が映し出す影を横切る

妖しい人が訪れてくれた　天使の喫茶店

憧れのスニーカー
　ショーウインドーにはく息が白い

豆の中に小銭も混じっている　大神社の節分

年男が張り出された　鳥居前

最近では寿司を食べるのが流行りの節分

鬼不在のほこらで、天使がラッパを吹く

鬼も福も笑っている

希望のミルキーウェイ　キミにも届く

キラキラ星は　希望の数

希望は雲の上まで飛んでゆき　輝いてきた

桜の花びらが舞う　空は青

花粉の黄色で描くタンポポの春

椿がポトリと落ちて、花粉の抽象画

手は届かないが、きっと届く

あれが南十字星だよ、藍の中のダイヤモンド

南十字星が見えるという島、暑い空

外国製の掃除機は吸引す　何もかも

水虫も痒くなる季節、気中花粉だらけ

夢の中の天使、　笑っている

ウサギはまだ追いかけている時計のベルが鳴る

花粉まみれの蜂だ　とっぺんぱらりのぷっ

切符は一枚だけ、ポケットに手を突っ込んだまま

心模様は虹色、もう迷わない

どうぞやすらかに　空になれ

ゾロ単で覚えた英単語　今は靄の中

錆びた線路　庭に埋まったままでいる

前が見えないときには、目をつぶってしまえ

雪解け水が降りてきて　蜂の羽音

七草粥を食べる　モチ入りだぜっ、オイっ。

曇った鏡　磨けばまたピカピカになる

モーツアルトの歌劇　オペラの女が笑う

Gが重くて肩がこる指揮者

雪のGを計算してみる　もうすぐ春

春はすぐそこ、路地裏の葉牡丹

ポカポカしてきた　コートを脱いでみる

トゲを溶かす薬がある　丸くなる

アンカでポカポカ温まる　丸くなる

猫の点滴一回三千五百円　血液検査だぜおい？

春はまだかな　猫の散歩道

積もる雪の中　陽だまりを見る

シッポだけ見えている　陽だまり

だるまさんが転んだ　今度は君が鬼

影を間違えて　人の人生を歩き始める

影が盗まれた夜　ティンカーベルが迎えに来る

CD-ROMを版画にしてみた　猫の足跡

大分よくなってきたポンさんの俳句百句作ろう。

笑う角に福　ニニンの宴会

雲ひとつ無い日本晴れの　笑顔

ぽんさんの謎が広がる　ま、一杯

年末年始はおでんで決まり

赤帽の地蔵が並ぶ寺で
御朱印のスタンプ(子供用無料)

千住七福神の横には　芭蕉の句碑が

こちらこそでございます。皆々様、連れ句ヨロシクぅ。

今年もヨロシク　連れ句しようぜ！

七色のおせち　正月用の箸でつつく

丸餅にはカビが生えぬ　年末の冷蔵庫

プラスチック入りの丸餅が並ぶ　客引きの声が

どぶろく入りポトフというのがある

暖かいシチューに　ポンと入れる

焼き芋屋のポカポカ　炭火でゴー

チラリと雪が降る東京で何もかも止まっている

雪となり　掃除する手が赤い

もう何年も　賀状出さずにゐる

香水臭いベアーが　押し寄せてくる

土星になった地球　土臭い

はみ出た絵の具は　地球を一周する

キャンバスの裏にも描く窓にも、ブロック塀にも

苦い思い出は　ゴミに出す師走

ホットケーキなら美味しいと思う
　　フライパンとバター

冷たい夜　ネコはホットおざぶをゲット

拾ってきたバットは、紫で塗る

チャーリーブラウンへ質問
　スヌーピーは何故屋根に

外に置かれた裸婦像のしもやけ

いい夢だけ食べてしまうバクで　不景気

夢の続き　つづりを閉じてみる

起きる時間です　花粉にまみれて

VVVの口惑い　松ぼっくり

白い雪は妖精　平和を振りまいている

白い招待状　ハトが届けてくれたよ

ポンポコ狸は木の葉と踊る

サンタから手紙をもらえる締め切りは十九日

ポインセチアを赤くして
　　二十五日の夜に買うケーキ

絵を描くばかりで　花盛り

羊の雲を描いてみる　絵の具が指先に

猿回しの猿にバナナを渡してみる

御家人斬り郎の渡辺謙よ　男だぜ

ジュラシックパークを見れば追いかけられる夢

迷ったら戻ればよい　また初めから

アンモナイトの中に入ってゆく　そこは天国

タマゴが先かニワトリが先か　ミトコンドリア

考える、　種になることを

フツーに咲いているようでも肥料は与えてる花

年末だからどうだというんだ　ジングルベル

歓喜に溢れる空　ホワイトクリスマス

かすれた線は　女のため息

絵に描いたクリスマスツリー　キラキラ

福袋に笑いと涙を詰めて　一万円也

ポンさんのクつが笑う　二足歩行のセンパイ

壊れた絵は直せない　新しい絵になる

ハエが飛んできて　カンバスの油絵の具にペタリ

画布の上に描くうたかたの花

森の石松という　ケチな野郎でゴザンス

凍頂烏龍茶をすする　ホッ

夕凪に揺られて　手紙の入ったボトル

ヴィーナスは　春誕生す

星が降ってくる　ジングルベル

ソリが描くアーチ　金色の街

千人の声が天空を揺らす

ドアを開けると　あたたかくて

晴れ着の女が笑ってくれた　賽銭をはずむ

言葉を拾ったよ、ありがとう。

味の素の穴を大きくしたから、愛もきっと

笑っているマーガレットたち

大量に新芽を出す　プランターのマーガレット

カモミールとかいって、結構丈夫

カモミールティー　午後の夢

青い空に白いバラが　真っ直ぐに

蜘蛛の巣が顔にペタリ　薔薇はすぐそこ

トナカイのハナはピカピカだ　アーチを描いて

キット来る　あの赤い山の向かふから

新しい掃除機の吸引力よ　毎日が大掃除後

七草粥が　内臓を癒す

飛べても飛べなくても　春はもうすぐ

最近天使をよく描く　小さな羽根だ

赤い羽根の天使は　悪魔かも

堕天使の羽根だ　返してあげようか

運はまた　天使が持ってきてくれる

ホールインワンの賞金で、ボージョレーなど

キャディーさんの目配せ　ナイスオン

夢か幻か　君の姿が

爆笑問題　笑いの渦に溺れている

銀杏を封筒に入れてチン　バリの塩

冷夏　もみじ赤くなれず散っている

一息つけば　新しい日曜日

猫は帰ってこずに　空っ風

風は冷たくなり　春をぢっと待つ蜘蛛

あとりえの天井　蜘蛛が子を宣てている

ポンと頭を叩かれて、最後の一滴を飲み干す

ちひさき箱　覗きこんでいるヒトを見る

不幸のミイラの笑顔　内臓保管の壺

大英博物館展　腰に来る

魔法瓶の中はコーヒー　ほろ苦く

獲物を見つけた　葡萄も酒になる頃

ぽかぽか　冬の木漏れ日にあたたまる

あいた席ばかりの場所　ポツンと君がいる

猫と夢のポケットに入っておりまする

金をもたげてバッタをゲットどちらもみどり色

クルクルと傘を回す　ヨッパが笑う

忘年会のやりくり　ボジョレーで

ポタリと一粒こぼしたなら　忘れてしまえ

滲んだ半紙のうへ　涙がポタリ

油絵はマヨネーズ　花を描いてみる

ふらりとまた旅立ってゆく　白い綿毛たち

二ライカナイが解らぬまま　白帆で海に出る

せわしなく行き来する　買い物袋たち

ベリーダンスの踊り子の胸元
激写するアマカメラマン

蹠に入りきらないつま先　ピカソの手のスケッチ

七色の橋の向こうまで　スキップ

少し雨が降った　大道芸人の靴下

色づいた葉を踏みしめて　空に続く道

草間彌生の水玉　光りだす

黄色い煉瓦が続いて　寂山子と逢ふ

年賀状の季節　ポケットに手を突っ込んでみる

心に『…』　墨がにぢんでゆく

あおくおひさまのまぶしきあさくうきはひんやり

空ばかり眺めて　お月さま

焼き芋はコートの中　急ぎ足

つながれたままの君　そっとニオイを嗅ぐ

雪のうへで爪を磨ぐなかれ　雪の具足跡が

キャンディのが好き　黒猫と

待たせてスマン　うしネ色

雲は太陽の下に　君は歌いながら

太陽はそっと隠れてゆく　君の影

イカスはいく天国（二〇〇三年十一月四日がスタートでした）

おわりに

二年前に、笹也太さんに、俳句の基本的な事を教えていただき、その後、俳句の書写を続けながら、俳句を作っています。

初回は山頭火の百二十句、次は、放哉の二百九十句。

去年は山頭火の三百六十句。今年は、山頭火が五百句。

俳句の書写というのは、思いのほか俳句が浮かんでくるものだと思わされます。先達（山頭火と放哉）の俳句の書写こそが、私の俳句の原点です。

また、連れ句とか、掲示板とか、電車の中とか、そういう、何か自分の世界以外のものに接触したときにも、俳句というのは沢山浮かんでくるものです。

俳句は、ぼちぼちと作りノートに書き留めています。気づかないうちにまとまった数になっているので、あまり増えすぎないうちに、句集にまとめておこうと思っています。

バラバラとしたメモ書きだったり、ノートに同じような句が並んでいると、俳句の整理がつかなくなってくるからです。

ノートに書いた俳句というのよりも、活字になった俳句というのは、ずっと残酷です。

グチャグチャと句が変化していくノートの中に置くだけでなく、まず、活字にして並べてみる。

この作業は、冷静に自分の俳句を組み立てなおしたり、推敲したりするのに、とても有効です。

パソコンの文字入力が出来る方は、是非、ワープロソフトなどで、ご自分の俳句を打ち込み、印刷してみてください。

きっと、今まで気づかなかった何かを見つけることが出来ると思います。

パソコンが普及して、自分で本も作れてしまう時代になりました。自分で原稿を作れれば、紙に印刷するにしても、とても安価に冊子を作ることが可能です。

電子出版や、デジタル化したデータ入稿という形で、句集を作るという夢が、俳句に親しむ方に、もっと身近になってゆけばいいなと思います。

電子本を、ワードで作る方法は、私の著書『電子本、自前出版してみませんか?』で詳しく説明しています。

こちらの本は、私のホームページで、無料で公開しています。(http://www.ojara.net)
電子本作りのお役に立てるかもしれません。
覗いてみてください。

俳句の方はまだまだですけど、自分なりに、細々と、俳句を作ってゆきたいと思っています。

稚拙な句集でありますが、最後まで読んでいただいて、ありがとうございました。

読んでいただいた皆様に感謝し、また、自分の楽しみのために、また俳句を作ろうと思います。

私の画集や、俳句の書写も、電子出版やホームページで、ネットから無料で配信しています。

お時間がありましたら、こちらのほうも、是非、ご覧になってみてください。

ご感想などありましたら、お寄せ頂ければ幸いです。

二〇〇四年春

絵と俳句　　おじゃら　りか